「みんなが知りたい！気象のしくみ 身近な天気から世界の異常気象まで」

菅井貴子　著
メイツ出版，2021年5月
128頁，1,793円（税込）
ISBN 978-4-7804-2448-5

北海道にすばらしい気象キャスターがいる．本書の著者，菅井貴子，その人だ．10年以上，ほぼ毎日テレビに出演している．時々刻々変化する気象情報を迅速に処理し，取捨選択の上，視聴者にわかりやすい表現で，しかも限られた時間で伝える．人物としての魅力も必要だ．著者はこのような気象キャスターの仕事を続けながら，本書で単著4冊目．驚嘆とともに尊敬の念を禁じ得ない．

著者は小学生向けと意図して執筆したらしい．すべての漢字にルビが振られている．いきなり苦言を呈すなら，漢字をフリガナなしで読めない子供たちにとって，本書は高度に過ぎる．裏を返せば，大人たちに紹介するに値する．

本書，会員にとって「知っている」ことが多いに違いない．果たしてそれは，どの水準で，だろうか．知識の定着は本棚の本に例えられる．本が雑然と置かれていても「知っている」と言える．図書館よろしく分類し整然と並べていても「知っている」．本棚を離れ机上でボロボロになっていても「知っている」．本などなくとも諳んじられるほどに「知っている」．著者の活躍を支える確かな知識と豊かな表現であるからこそ，本書を読めばどの水準の「知っている」なのかを内省できる．

気象の知識をどう整理すればよいか．雲・雷・台風など現象で整理する．観測・予報・データ解析など手法で整理する．日本や世界の地域で整理する．概ねこの3つが思いつく（放射・力学・雲物理などの学術分野での整理もあろうが）．本書は概ね，現象，手法，地域で章立てされ，102のトピックに分かれる．

身近な気象は視覚に訴えやすい．第1章「身近なことから学ぶ気象のしくみ」には，写真・図表・イラストが満載だ．例えば，雹を知るのは，まず雹を見るのがよい．本書には手のひらに乗った雹の写真がある．その上で，どういう過程で雹となるのか，雲のイラストとともに語る．さらに，どういう時に雹になるか，天気図に上空の寒気を重ねる．痛ましくもブルーベリーが地面に落ちている写真は，生々しい雹害の一コマだ．たった数ページで，解説は自然現象から社会影響に及ぶ．

著者が苦労したのは，観測と予報が中心の第2章「天気予報がわかる！気象観測のしくみ」ではなかろうか．現象と違って観測や予報は視覚に訴えにくい．ややもすれば，退屈な技術解説や規則の羅列になりがちなところ，著者は表現力で魅せる．「前線は空気のケンカ」，なるほど，前線は軍事用語を語源とする．気温は「芝生の上1.5m」の値，ベビーカーの赤ちゃんはそれより暑く感じる．私はそう指摘する著者の優しさを感じる．

ひょっとすると第3章「日本，世界の気候と異常気象」で，多くの読者は北海道の解説を手厚く感じるかもしれない．しかし，それは著者が北海道で気象キャスターをやっているからではないだろう．北海道は広いのだ．広いからこそ，東北と北陸を足したくらいの気候の多様性が，北海道にはある．全国ニュースの天気予報では，北海道を小さく描いていることに注意したい．他，第3章では気候変動や異常気象のトピックも充実している．

著者文才のなすところ，本書は一つトピックを読むと，また次のトピックが気になってしまう．読み進めるとトピックが明確なイメージとして定着していく．1トピックあたり1～2頁と，細切れの時間で読みやすい点もよい．冒頭，小学生には高度と指摘したが，中学生や高校生なら読めるだろう．気象に興味がある人，とくに若い人にお勧めできる．

余談だが，著者の似顔絵が各項目の右上隅に付されている．私の著者の印象は，テレビで見ると②の似顔絵に，実際に会うと④の似顔絵に近い．本書を手に取り，北海道のすばらしい気象キャスターの人となりも知ってほしい．

（北海道大学　稲津　將）

© 2022　日本気象学会